



普濟寺

国宝六面石幢

三次元計測



普濟寺六面石幢 三次元計測図 谷加工画像

第7号では普濟寺の六面石幢を取り上げました。六面石幢は立川市で唯一の国宝として知られています。古代・中世部会では六面石幢の三次元計測をおこない、肉眼では把握しづらかった細部まで調査できるようになりました。特集ではこの調査の概要と、六面石幢をより深く知るための知識をまとめています。

刊物紹介では今年度刊行される新編立川市史最初の資料編「地図・絵図」の内容を詳しく紹介しています。歴史部会の「向郷遺跡 竹内勇貴氏寄贈資料調査報告書」、民俗・地誌部会の「砂川青年団資料集—青年団機関誌「いづみ」・戦後砂川青年団についての座談記録—」とともに、平成31年4月から頒布開始予定です。より多くの市民の皆さまに手に取っていただけたら幸いです。

・新しい市史の編さんによせて	2
・部会短信	3
・立川市唯一の国宝！ 普濟寺 六面石幢	4
・連載*	
・立川おっこぼれ話「みんなであうたう みんなの歌」	2
・資料をよむ～資料としての青年団機関誌～	8～9

・部会特集（古代・中世部会）	
・普濟寺 国宝六面石幢の三次元計測	5～7
・第3回・第4回関連講演会のご報告	10
・平成30年10月～平成31年3月活動報告	11
・受贈図書・資料提供者	11
・刊物紹介	12



新しい市史の編さんによせて

立川市史編さん委員の友友一雄さんに、立川市史に寄せる思いをうかがいました。

歴史・記録を未来に伝える (友友 一雄 編さん委員)

いま立川市は再開発のなかで大きく変貌を遂げつつありますが、歴史的には大戦期の陸軍飛行場、その後の米軍基地、自衛隊基地といった大きな流れの中にあります。こうした大きな歴史を適切に叙述することは将来を考えるうえでも大変重要です。また、地域の人々の日々の生活が住民の視点で記録されることが期待されます。この実現には、役所などに残される歴史的な公文書とともに地域の人々からの情報が欠かせません。

しかし、戦時中の文書・モノなどの史資料も時間の経過とともに瞬く間に消え、地域にあった信仰の拠点、小道や木立なども次第に変化します。すべてを残すことは難しいことですが、重要なモノをしっかりと保存することが大切であり、それが実現できれば、後日、博物館展示や学校教育など、さまざまな活用が期待できます。『新編立川市史』は、市民が資料に立ち返って考えるための導入の書となります。

行政文書を含め重要な地域の情報を保存公開する機関に「文書館（アーカイブズ）」があります。公文書管理などに関わって現在、もっとも注目される施設のひとつであり、区や市町村のレベルでも「文書館」の重要性が認識されつつあります。『新編立川市史』に記述はあるが、根拠となる史資料が存在しないという状況が発生しないように、未来に向けた史資料保存の取り組みが期待されます。



立川おっぼれ話

みんなでうたう みんなの歌

一般的に、歌というのは詞の解釈や音のリズムなどを楽しむものです。言葉と音楽を楽しむということに加え、歌には「みんなで一緒にうたうことで団結力を高める」という働きもあります。校歌や特定のイベント、チームなどのために作られた応援ソングなどがそれに相当します。

今回「資料をよむ」で紹介した砂川青年団にも「青年団歌」が存在しました。砂川における戦後の青年団は、これからの教育・文化をどのように良くしていくかを団員自身が考える、若者の自主性が要となって活動する団体でした。現代では毎日のように新しい歌が生み出されていますが、当時は自分たちのための歌を作ること自体、大変特別な体験でした。青年団歌を作り、そしてそれをうたうことは、青年団の独自性と協調性を高め、なにより思い出を作るという点で大きな役割を担っていました。砂川青年団の団員だった方にお話をうかがったところ、当時の歌謡スターの前で青年団歌をみんなでうたったところ大変褒められたことを今でも誇りに思っていること、団員の方は長い年月を経た今でも歌を忘れずにうたうことができるとなどを話してくださいました。

昭和5年(1930)に作られた「立川小唄」には、当時の立川の様子が歌詞にふんだんに盛り込まれています。大正11年(1922)に立川飛行場が開設され、飛行場の発達とともに立川の街は「空の都」として急速に発展しました。豊泉喜一氏によれば、「立川小唄」は当時の文化的な機運に乗って企画されたもので、作詞家に歌詞の制作を依頼したに加え、立川の知識人の後援、公募による意見も取り入れられたそうです(豊泉喜一2012「立川小唄考察」『立川民俗』18 立川民俗の会)。お座敷で踊りとともにうたわれた「立川小唄」は宴会などでも広く親しまれたそうです。歌詞には当時の立川の姿が生生きと描写され、歴史的・文化的にも意義のあるものとして石碑も残されています。

歌というのは、その当時の時代背景を色濃く反映するものです。歌を資料として捉えることも、人びとの生活と文化を知るうえで大変重要なことなのです。



立川小唄記念碑

「空の都」立川の様子をうたった立川小唄の存在を後世にまで伝えるため建立された記念碑。かつての立川飛行場正門前(現在の多摩信用金庫本店そば)に設置されています。



部会短信 (平成30 (2018) 年度後期)

先史部会

平成31年(2019)3月15日に、『向郷遺跡 竹内勇貴氏寄贈資料調査報告書』を刊行しました。多摩地域における縄文時代中期中葉の勝坂式土器(約5,200~5,000年前)の良好な一括資料です。立川市歴史民俗資料館および市政情報コーナーで4月から頒布する予定です(予価1,000円)。大和田遺跡第1次・第3次・第4次地点については、引き続き土器および石器の実測図の作成を進めています。また第4次地点の土器について、胎土の岩石学的分析および植物種子圧痕レプリカ分析を実施しました。古墳時代調査では、沢船堀の地中レーダー探査の一環として3月に全景写真を撮影する予定です。



大和田遺跡第1次・第3次・第4次地点出土資料の調査風景

古代・中世部会

資料編刊行に向けて、主に普濟寺に関係する資料の調査を進めています。普濟寺では国宝に指定されている六面石幢の3D計測調査を実施しました。肉眼ではわかりにくかった六面に刻まれている仁王像・四天王像の姿を鮮明な画像で記録できました。あきる野市にある光厳寺と陽谷院では大連楽園や位牌などを調査したことで、普濟寺第六世住持天叟宗祐和尚についての貴重な情報を得ることができました。奥多摩町では第三世住持直庵啓瑞和尚ゆかりの普門寺と小河内神社で、仏像や扁額等の調査をしました。普濟寺以外では、青梅市の玉泉寺に伝わる建暦2年(1212)筆写の大般若経や日の出町の新井業師堂にある古位牌などを撮影しました。



奥多摩町普門寺での調査風景

近世部会

平成31年(2019)1月19日に開催した「多摩郷土誌フェア関連講演会」では、2名の講師による講演を行いました。富善一敏氏(近世部会長)では去年刊行された『鈴木家文書目録』の成果を盛り込んだ『鈴木平九郎と近世文書社会』というテーマで、太田尚宏氏(近世部会副会長)には「近世後期における多摩地域の平地林と『山仕事』というテーマで話していただきました。市史編さん事業では、刊行物を出すこと以外にも、編さん過程で明らかになったことをお知らせしていきたいと考えています。この度の講演会もその一つです。講演会でいただいた皆さまのご意見・ご質問を大切にしていきたいと思っております。



当日の講演会の様子

近代部会

近代部会では、引き続き『資料編 近代②』(2020年度刊行予定)にどの資料を取録するかを選定を行い、その後、市民のみさんが読みやすいように、資料に記された文章を解説し、パソコンで入力しています。

記されている文字は、筆やペンなどで記された手書きの文字と活字の2つがあります。近代に作成された資料でも、江戸時代の古文書といって皆さんが連想されるような、崩れた手書きの文字で記される場合があります。また、活字を読む際も、現在あまり使わない漢字(旧字・異体字)を含んでおり、専門的な知識が必要になります。地道で大変ですが、70年以上前に記された文字を通して当時の人々と出会える作業です。



砂川村役場文書「大正10年 庶務綴」より(部分)

現代部会

平成31(2019)年度に刊行予定の『資料編 現代①』に向け、引き続き掲載資料の選定作業と、選定した資料の文面を打ち込んで原稿化する作業を進めています。並行して、立川市歴史民俗資料館などが所蔵する市内の資料や、防衛省防衛研究所などの市外の機関が所蔵する資料の調査も継続中です。

また文書資料の調査だけでなく、現代の立川に関わってこれたさまざまな立場の方からお話を伺う聞き取り調査も引き続き進めています。この間には、清水庄平市長に立川・砂川の現代史について聞き取り調査を行ったほか、11月5日には立川基地に関する座談会を実施し、市民の皆さまから貴重な証言をいただきました。



清水庄平市長への聞き取り(平成30年12月25日)

民俗・地誌部会

民俗・地誌部会編『砂川青年団資料集』の頒布を、4月から開始します。これは、資料編とは別に、まとまりある資料を調査報告書として刊行するものです。掲載資料の解説を、本誌8・9頁の「資料をよむ」に掲載していますのでご覧ください。

11月には富士見町住宅自治会にご協力いただき、入居開始当初から今日までの生活や自治会活動に関してのお話を伺い、資料の閲覧・借用をさせていただきました。

2019年度は柴崎地区(旧立川村)についての資料編刊行に向けて編集作業を進めるとともに、砂川地区(旧砂川町)での調査を本格化します。今年度は59件の調査を実施することができました(2月現在)。ご協力いただいた皆さまに厚く御礼申し上げます。



富士見町住宅自治会での聞き取り調査

普濟寺 六面石幢

JR 立川駅から南へ進み、多摩モノレール柴崎体育館駅からおおよそ700m 西へ進んだ柴崎四丁目に普濟寺はあります。

普濟寺は南北朝時代、文和2年(1353)、鎌倉建長寺の物外可什を招いて創建されました。そして延文6年(1361)、立川市の唯一の国宝、六面石幢は作られました。

六面石幢ってどんなもの？

六面石幢は、高さ166cm、幅42cm、厚さ9cmの緑泥片岩(秩父青石)6枚を六角形の台座の上に組み立て、その上に六角形の笠石と宝珠が載せられています。6面のうち2面には仁王像(阿金剛、吽金剛)、4面には四天王像(増長天、広目天、多聞天、持国天)が刻まれています。

石幢とは？

石幢とは石で造られた幢(仏や菩薩を装飾する荘厳具のひとつ。旗、のぼり)のことです。幢は主に布で作られますが、宝珠できらびやかに飾られたものや、木の板で作られたものもあります。中国から伝来した様式のもので、唐の時代から作られるようになったそうです。

特徴は？

板碑(石でできた卒塔婆)と似ていますが、板が六角形に組み立てられている点と、その板に図像が刻まれている点においてとても珍しく、大正2年(1913)に国宝(旧国宝)に、文化財保護法施行後の昭和28年(1953)に改めて歴史資料として国宝に指定されました。

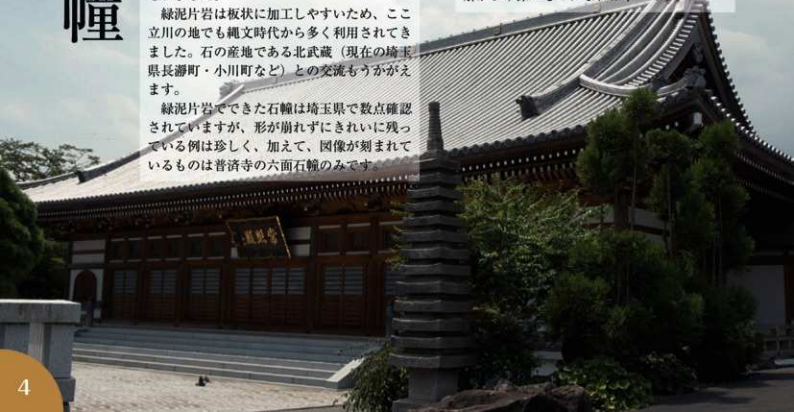
緑泥片岩は板状に加工しやすいため、ここ立川の地でも縄文時代から多く利用されてきました。石の産地である北武蔵(現在の埼玉県長瀬町・小川町など)との交流もうかがえます。

緑泥片岩でできた石幢は埼玉県で数点確認されていますが、形が崩れずにきれいに残っている例は珍しく、加えて、図像が刻まれているものは普濟寺の六面石幢のみです。



国宝である六面石幢は保護の観点から直接接触する調査が大変難しいため、今回は写真を利用した非接触型の三次元計測をおこないました。その結果肉眼で見るとよりも詳細で、より安全な観察が可能になりました。

次のページから、三次元計測の説明とそこから見えてきた石幢の姿を解説していきます。実際に実物を見る前に、六面石幢への理解がより深いものになれば幸いです。



普濟寺 国宝六面石幢の
三次元計測朝倉一貴
古代・中世部会特定部会委員

東京都立川市普濟寺に所在する国宝六面石幢の三次元計測をおこないました。

六面石幢は延文6年(1361)に造立され、古くは江戸時代に大田南畝や「集古十種」「江戸名所図会」(図1a、b)等に取り上げられ多くの人々に注目されたことがうかがい知れます(斎藤2007)。幾人もの好事家が普濟寺を訪れ、拓本を採ったことでしょう。和紙を貼り付け摺ることのダメージは、累積的に画像を見づらくしました。また、「南畝考言」によると雨除けの茅葺きがあったとのことですが、露曝していた時期があり(図2)、風雨に晒され現状では6面いずれも劣化・摩耗が激しく、画像の観察が容易ではない部分が多くあります。そのため文化財保護の観点と精密な図化を目的に、非接触の三次元計測を採用しました。

今回用いた SfM/MVS (Structure from Motion / Multi-View Stereo) は、写真や動画からカメラの撮影位置を算出し、対象の3次元形状を復元するコンピュータビジョン分野の技術です。近年、考古学の分野でもさまざまな遺構・遺物の図化計測に多く用いられ始めてきた手法です。

現場作業は、基本的にはデジタルカメラを使用して写真を撮影するだけなので、手作業で実測する従来の方法に比べ迅速かつ簡便であり「非接触・非破壊」の利点があります。当該資料の撮影はデータ処理の関係で2回にわけ実施し、六面石幢の覆屋内で細心の注意を払いおこないました(図3)。

画像の凹凸を入念に観察して、側面・上面の全域を細部にわたり撮影した画像は、1,800枚をかぞえます。処理にあたっては Agisoft 社の Photoscan Professional Edition (1.4.4) を使用し、株式会社ランクのご協力を得て PEAKIT 処理を施しました。

PEAKIT は3次元データを視覚的に表現する株式会社ランクの特許技術で、「開度」という着目点から周辺の起伏形状情報の見晴らし度合いを数値化し、尾根と谷のように凸凹を抽出・強調、他にレリーフ表示や距離段彩など複数の画像を選択的に重ね表示する技術です(横山・千葉2017)。

作成した処理画像では、拓本や写真では判読が難しかった微妙な凸凹を稜線のように強調し可視化されました。



図1a ▶



図1b ▶



図1a、b: 斎藤肇成1834「江戸名所図会」

図2: 覆屋のない六面石幢
どちらも立川市歴史民俗資料館所蔵

▲図3: 現地での撮影の様子。LEDリング照明をつけたデジタル一眼レフカメラなどを使用した。

▲撮影した六面石幢全体の画像データをより生成した六面石幢の3次元モデル。



参考文献

- 斎藤肇一 2007「普濟寺六面石幢と江戸の好事家―「集古十種」「南畝考言」「江戸名所図会」―」『多摩のあのみ』第126号 財団法人たましん地域文化財団
- 横山真・千葉史 2017「PEAKITによる考古遺物の視覚表現」『季刊考古学』140 吉川弘文館



持国天

持国天は四天王の一体で、東方の守護神です。甲冑を身に着けており、手には剣を持っています。

この写真は実物を一般的なカメラで撮影した画像です。顔全体が少しのつべりとした印象があります。

三次元計測では細かな凹凸を無数の点で捉え、石そのものの色味を排除することで、肉眼で見た時よりも明確に像を観察できます。画像表現によって見え方を変更することにより、それぞれ目的に合った調査が可能になります。



尾根画像

尾根（凸部分）を強調した画像は肉眼で見ると近い見え方になります。石を掘り山になった稜線の部分を黒っぽく表示し、表面の状態をそのまま浮かび上げることができるのです。

顔の彫り方と衣服の彫り方が異なるように、部位によって表現の仕方はそれぞれ違います。石にノミを入れた加工の痕跡が分りやすくなるため、石をどのように削って像を描いたのか、表現・加工の差を明らかにできます。



谷画像

谷（凹部分）を強調した画像は、削られた凹の部分反転させて凸にすることで輪郭線を明確にさせる表現です。

実物とは異なる見え方になりますが、劣化・摩耗してしまった表面の微妙な差異が分りやすく表現されるため、描かれた像や文字が観察しやすくなります。

結わえた髪表現は通常の撮影をした写真ではわずかな凹凸しか見えませんが、この谷画像では細やかな表現がはっきりと分ります。

広目天の谷画像を例に挙げ、描かれているものから何が分かるか細かく見ていきましょう。

図像

広目天は四天王の一体で、西方の守護神です。手には筆と巻物を持っており、何かを書き留めているような立ち姿をしています。

表情は厳しい目つきをしており、眉間のしわや真一文字に結ばれた口元が守護者としての威厳を思わせませす。

服部の辺りには獅鬚しゆひという獣面の装飾も見え、甲冑の網目の表現と布の柔らかく流れるような表現の違いもはっきりと分かります。

四天王と仁王像はそれぞれ像が置かれる方角、持ち物、衣服に一定の決まりがあるため、それらを頭に入れてから見るとより鑑賞しやすいです。

装飾表現

六面すべてに共通して板の上部に装飾表現が見られます。描かれているものは植物や動物、貝、七宝などであると思われ、これらの図柄を吉祥文様とも呼びます。

吉祥文様にはそれぞれ「長寿」「富」「繁栄」「夫婦円満」などの願いが込められており、縁起の良いものとして取り入れられます。中国やその他の文化の影響を受けたものと日本独自の形式を持つものがあり、時代や地域によって扱われる題材には変化が見られます。

銘文

像や刀などに、作られた経緯や作成者などを後世まで残すために刻まれた文字記録のことを銘文といいます。六面石幢では広目天の面にのみ残され、右図はこれを活字で表したものです。

延文6年(1361)に造られ、性了という人物の主導のもと、道圓によって刻まれた像である、という意味です。

延文六年辛丑七月六日
施財性了立
道圓刊



三次元計測の時の様子

おわりに

今回ご紹介した三次元計測の詳細な情報は、順次発行の市史編さん刊行物に掲載予定です。六面石幢の立つ多摩川の段丘面からは、春には根川沿いに並ぶ桜並木が眼下に見え、天気が良ければ遠くに美しい山並みを望むことができます。六面石幢についてよく知らなかったという方も、そうでない方も、この機会に足をお運びになられてはいかがでしょうか。

資料をよむ

～資料としての青年団機関誌～

民俗・地誌部会会長 中野 泰

はじめに

民俗・地誌部会においては、人々の生活とその移り変わりを調査し、記録する試みを始めている。ここでは、その成果の一つとして刊行する調査報告書「砂川青年団資料集—青年団機関誌『いづみ』・戦後砂川青年団についての座談記録—」に掲載した青年団機関誌を読み解いてみたい。

『いづみ』は、第二次世界大戦後の昭和25年（1950）から昭和50年代まで、砂川青年団の文化部によって発行された機関誌である。機関誌は、巻頭言、発刊に寄せることば、団員の声、青年団事業計画や各部だより等で構成され、素材で味のある図版とともに、ガリ版刷りで刊行されていた。それは、コンピュータグラフィックスが開発される以前を若者として生きた世代、すなわち、今日においては、現役を引退した70代から90代の方々の、手作りの作品と言える。その記述には、生活環境の整った今日においては想像することが難しい内容も少なくなく、まるで異文化のように受け止められる点もあるだろうが、当事者達自身にとっては、若かりし頃を追慕したり、俳句・詩を楽しんだりすることができるのものである。以下では、地域社会の歴史や文化を明らかにする方法、つまり、学術研究調査の資料としての読み方を試みてみたい。

1. 盆踊りと青年団

敗戦後、新たに発足した各地の青年団は、新たな時代に向け、旧来の制度、陋習（わるい習慣）、価値観を改めようとする志と情熱に包まれていた。戦後に再発足した砂川の青年団も例外ではない。例えば、青年団長が綴ったと思われる文章には、荒廃した焼跡を背景に伸びていく雨後の若葉に喩えて、文化国家再建に向けた勉学、運動、勤労の必要性が、青年の可能性と美しさとともに謳われている（「巻頭言」昭和二十五年春季号）。当時の『いづみ』からは、このように、新たな文化や国家を創り出そうとする心意気を随所で感じることができる。

盆踊りを例に、各部だよりを読み比べてみよう。昭和29年（1954）の文化部では盆踊りの「健全化」を主旨として、青年団の本部会議、支部長会議を開き、婦人会とも懇談を重ねて必要性を共有し、盆踊りの「模範的な型を創り出そう」とした。だが、結果として「各地」各様のやり方で盆踊りが実施されるにとどまった（「文化部の事業に付いて」1954年秋季号）。青年団を構成する地域単位である支部の意向が強く、本部が進めようとする方向性へなかなか同調しなかったのである。「模範的な型」を創出しようという意図の背景には青少年の風紀を維持しようとする行政の意図も垣間見えるようである。その後も盆踊りの改善は計画にあまり（「社会部経過報告」13号 1958年）、練習日を長く確保したい、盆踊り発表会を1日だけでなく、2～3日かけて行いたい、コンクール的に行いたい等の要望も会議にのぼり、ようやく、5年後に「統一盆踊り会」を達成することができた（「社会部事業を顧みて」16号 1960年）。砂川の風物詩には「砂川音頭」がある。1950年代初頭に制作された「砂川音頭」の数年後において、盆踊りを統一しようとする機運がなぜ、どのように



写真1 『いづみ』表紙 見開きは16号 1960年

して生まれたものなのか、興味深いところではないだろうか。各部だよりという項目は、青年団の事業報告の欄になっており、経年的に読み比べてみることで、青年団活動の変化を読み取っていくことができるのである。

2. 生活改善の試み

同じ改善という言葉を用いて、家庭生活のそれに重きを置くものを「生活改善」という。国が進めた政策としても知られる。砂川の青年団においては生活改善を複数の部で担当した。文化部においては「女性の集い」という話し合いを開き、自主的な女性による営みにしようと試みていた。ある年の「女性の集い」は、家事労働の改善を話題として「余暇の善用」と題した講演が行われ、余暇の過ごし方が話し合われた。折しも、「毎日が戦争」の様な蚤の最盛期で、多くの青年女性は余暇がなく、参加者は40名余りであった。文化部長は「昼休に女の方は洗濯をしているのに男の方は昼寝などしているのが現状ですが此れなど自分の兄弟に自分の物はさせる様にする」等と講評した（『女性の集い』1954年秋季号）。盆踊りとはまた異なった意味で家庭生活の改善は容易なものではなかった。しかし、機関誌には、家の行事の改善を試みた例も認められる。それは、農家の長男であるにもかかわらず、結婚式を改善した内容である（『厚き壁を破って』14号 1959年）。自宅ではなく、都立西多摩婦人生活館にて結婚式を「新しい形」で行った青年は、当時の準備、式次第を詳述し、「厚き壁は外面的なものばかりではなく、自分達自身の心の中にある厚い壁を打ち破る事が何よりも第一に必要」と所感を綴っている。この文章からは、青年団活動を自らの生き方へ発展的に解消していった姿を読みとることができる。結婚式の変化については、家で行う結婚式（かつては祝言と称した）が結婚式場で行われるようになったと図式的に理解されているが、この例のように、結婚式を家制度でもなく、資本を背景とするサービス産業でもなく、手作りで行っていたという史実が立川市内にもあったということが、この文章から明らかになる。



写真2 都立西多摩婦人生活館での結婚式
新郎新婦や両家の参列者へ盃が渡されている様子
(豊泉喜一氏所蔵写真)

3. 資料としての『いづみ』の意義

『いづみ』から浮かび上がってくる青年達の経験や考え方には固有の背景がある。民俗・地誌部会においては、主として聞き取り調査によって、その地域的な背景と生活変遷を明らかにしようと調査研究を進めている。青年団の文書記録をはじめ、役場文書、都や国の行政文書資料等と関連づける作業も欠かせない。この機関誌には、全国的によく知られている砂川闘争に関連する文章も収録されており、多方面への活用が可能と思われる。

『いづみ』の頁を繰ると、少なからざる読者は、今日のご高齢の方々若かりし年代に綴った「文集」とでもいった性格をそこに感じるかもしれない。しかし、だからといって軽んじて扱うべきものではない。『いづみ』は、歴史や民俗を読み取る資料としての意義を豊かに有しているからである。後生の者がこれからの社会や未来を考え、豊かにしていく上でも顧みることができる資料としての意義をも有しているのである。

今後とも、このような資料の発掘に努力していく予定であるが、関連する資料をお持ちの市民の方々へ、末尾を借りて、ご協力を改めてお願いする次第である。



第3回関連講演会のご報告

平成30年3月11日（日）、市史編さん事業での第3回目の講演会を開催しました。立川市史編さん編集委員谷口康浩氏（國學院大學文学部教授・立川市史編さん先史部会長）と、鎌倉佐保氏（首都大学東京都市教養学部教授・立川市史編さん古代・中世部会長）を講師として、市史編さん事業の成果を踏まえながらお話しいただきました。

谷口氏には「向郷遺跡と多摩の中期縄文文化」と題して、錦町・羽衣町にある向郷遺跡を中心に、多摩地域の縄文中期の文化や生活についてご講演いただきました。まず、向郷遺跡は中期の拠点的な集落のひとつであり、集落の中央には集団墓が営まれていたことが紹介されました。その後、多摩地域では中期に拠点的な集落が増えたこと、この時期にアズキやダイズ、エゴマなどが栽培されたことが集落の増加を支えたと考えられることが紹介されました。また、多摩地域の住居や土器、葬制などに中部高地と共通する要素がみられることから、中部高地で栽培技術を確立した人たちが多摩地域で開発を進めたのではないかと述べられました。

鎌倉氏には「鎌倉時代の立川氏」と題して、市名の由来になった立川郷を名字の地とした武士立川氏についてお話しいただきました。立川氏が登場する立川文書は常陸太田市に移り住んだ立川氏の末裔の家から発見され、現在は立川市歴史民俗資料館に所蔵されています。会場では実際に文書の写真を使った説明があり、立川氏のなかにも複数の系統があったということでした。また、立川氏は鎌倉幕府に出仕し、立河郷・土淵郷などの土地を積極的に買い取っていたことや、芝崎と名乗っていたこともわかりました。



講演会の様子



谷口康浩氏



鎌倉佐保氏



第4回関連講演会のご報告

平成30年度の関連講演会は、平成31年1月19日（土）～20日（日）におこなわれた多摩郷土誌フェア関連事業として1月19日（土）に開催されました。「江戸時代多摩地域の村社会」を共通テーマとして、近世時代の多摩地域における立川市域の特徴などを紹介・解説していただきました。

第1部：太田尚宏氏（国文学研究資料館研究部准教授）

「近世後期における多摩地域の平地林と「山仕事」

第2部：富善一敏氏（東京大学経済学部資料室特任専門職員）

「鈴木平九郎と近世文書社会 — 「公私日記」を中心に—

会場となった女性総合センターアイム5階第3学習室には、立川市内外から延べ83名の方が来場され、講演会は盛況のうちに終了しました。



太田尚宏氏



富善一敏氏





平成30年10月～平成31年3月活動報告

月	日	活動内容
10月	9日	近世部会：昭島市廣福寺調査
	16日	第8回・立川市史編さん委員会会議
	19日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
11月	29日	第1回・先史部会会議
	5日	現代部会：聞き取り調査（市民座談会）
	9日	古代・中世部会：普濟寺六面石幢 3D 実測調査
	10日	民俗・地誌部会：富士見町住宅自治会調査（自治会組織関係）
	15日	古代・中世部会：日の出町新井薬師堂調査
	16日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	20日	古代・中世部会：立川文書修復事業開始
12月	23日	古代・中世部会：あきる野市光厳寺・陽谷院調査
	29日	民俗・地誌部会：富士見町住宅自治会調査（衣食住関係）
	1日	第2回・民俗・地誌部会会議
	4日	古代・中世部会：銅鉦鼓調査
	9日	古代・中世部会：奥多摩町普門寺・小河内神社調査 第3回・近世部会会議
	13日	古代・中世部会：青梅市玉泉寺調査
	16日	第3回・近代部会会議
	20日	現代部会：特定部会会議
	21日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	25日	現代部会：聞き取り調査（清水庄平市長） 第3回・現代部会会議

月	日	活動内容
1月	8～27日	中央図書館展示（市史編さん事業と図書資料）
	18日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
2月	19日	第4回・立川市史編さん関連講演会
	8日	古代・中世部会：立川文書修復中調査
	15日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
3月	11日	第3回・民俗・地誌部会会議
	12日	第4回・現代部会会議
	14日	現代部会：特定部会会議
	15日	新編立川市史資料編地図・絵図刊行 先史部会：竹内勇貴氏奇蹟資料調査報告書刊行 民俗・地誌部会：砂川青年団資料集刊行 先史部会：土器・石器の実測委託成果品の納品 先史部会：土器胎土の分析委託成果品の納品 先史部会：槽物種子庄痕レプリカの分析委託成果品の納品 市民協働作業（立川の史料を読む会）
	19日	第9回・立川市史編集委員会会議
	26日	第9回・立川市史編さん委員会会議
	30日	第4回・近世部会会議
	予定	先史部会：沢荷完全景写真撮影

受贈図書・資料提供者（平成30年1月1日から平成31年1月31日まで）

以下にご芳名を掲載し謝意を表します。（敬称略・五十音順）

※資料借用をさせていただいた方のご芳名は除きます。

- 【個人】安孫子昭二、牛米努、加藤正彦、是枝久常、猿渡繁和、神かほり、寺島正芳、豊泉喜一、旗野和良
 【機関など】株式会社立飛ホールディングス、清瀬市企画部市史編さん室、玄武山普濟寺、公私日記研究会、狛江市企画財政部市史編さん室、成田市立図書館管理係市史編さん担当、八王子市史編さん室、羽村市企画総務部市史編さん室、府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課市史編さん担当、福生古文書研究会、横浜市史資料室

市史編さん広報紙 *たちかわ物語* vol.7

平成31（2019）年3月20日発行

発行 立川市

〒190-8666 東京都立川市泉町1156-9

編集 産業文化スポーツ部地域文化課市史編さん担当

〒190-0022 東京都立川市錦町3-5-22 YAZAWA DEUX ビル 201

TEL (042)506-0021 / FAX (042)525-1601

E-mail chiikibunka-at-city.tachikawa.lg.jp

URL http://www.city.tachikawa.lg.jp/chiikibunka/sisi/hensanshitu/shishi_top.html

印刷 ぎょうせいデジタル株式会社

【市史編さん広報紙に関するご意見・ご感想をお待ちしています】



市史編さん広報紙はこちら
からアクセスできます。

刊行物紹介

平成31年3月刊行の新編立川市史最初の資料編「地図・絵図」。地図から何が分かるのか、どこに注目して見れば良いか、章ごとに見どころを解説します。

第1章 近代

解説 近代部会部会長 保坂一房

第1章「郊外農村から空都・軍都へ」では、明治4年(1871)頃から昭和20年(1945)にいたる計37点の絵図と地図を掲載しています。

明治初年に作成された『多摩川流域村々絵図』には水源から河口までの村々が描かれていて、多摩川中流の左岸に位置する柴崎村は並山県に属していました。地租改正では、柴崎村・砂川村とも一筆ごとの土地の形状や配列、地番などを示した字引絵図が作成されました。市内各地の字引絵図17枚を掲載し、さらに付録DVDでは細部までご覧いただけます。明治22年(1889)に甲武鉄道(現JR中央線)が開通して、立川の近代化が推し進められました。内藤新宿八王子間馬車鉄道予定線見取図と宮王鉄道線路略図(大宮-砂川-八王子間)は、未完におわたった明治時代の鉄道計画を示したものです。

大正11年(1922)に立川飛行場が開設し、陸軍航空第五大隊(のち陸軍飛行第五聯隊)が移駐してくると、立川村は翌12年に町制を施行しました。当初、立川飛行場は民間航空の拠点でもありました。著名な外国人飛行家の来訪が相次ぎ、TACHIKAWAの名前は「空都」として世界的に知られるようになります。昭和5年(1930)には立川駅南口が開設され、駅周辺の市街地化が急速に進んでいきます。当時発行された3枚の立川町全図は、変わりゆく町の様子を如実に表しています。

昭和8年(1933)、民間航空は逓信省管轄の東京飛行場(羽田飛行場)に移転します。翌9年に陸軍航空本部補給部が所沢から移転してきて軍事施設と軍需工場の集積が進むと、日本有数の「軍都」に変貌して、昭和15年(1940)に立川町は市制を施行します。終戦末期の疎開要図と立川市全図(公共待避所記入)は、立川飛行機(株)の疎開計画と空襲に対する立川市の公共待避所を記したものです。



多摩川流域村々絵図(一部)
明治4年(1871)頃
拡大部分に「柴崎村」と見える

第2章 現代

解説 現代部会部会長 沖川伸夫

敗戦後にスタートした米軍立川基地は、朝鮮戦争・砂川闘争・ベトナム戦争を経るなかで、日本だけでなく世界の情勢と密接にリンクする存在であり、立川の現代の前半は、「基地のまち」として発展してきました。高度成長の時代には、立川市は砂川町との合併を実現し、南口地区画整理事業に着手するなど、現在の立川の街並みにつながる布石が打たれましたが、立川のまちづくりが急速に進化したのは、基地の土地利用が可能となる返還後からといえます。

基地跡地には、国営昭和記念公園や立川防災合同庁舎・東京地裁八王子支部など、多くの国の施設が移転するとともに、商業・業務中心のビル群とアートの共存する「ファール立川」が形づくられ、立川の現代の後半は、商都へと生まれ変わっていきました。また、南北を縦断する多摩都市モノレールも開業し、立川駅は多摩地域の交通の要衝としての重要性を増しつつあります。

こうして、「多摩地域の中核都市」へと発展を遂げた立川市。今回の「地図・絵図」に掲載された地図資料は、立川の現代を知るうえで、重要な手がかりとなり、基礎資料といえます。そこには、いまは形を変え、存在しない軍事施設・工場・店舗・映画館・旅館・公共施設・学校・農地・河川・地名などが記載されており、土地利用の履歴が刻まれています。また、久々に終わった米軍基地の跡地利用計画も含まれており、時々刻々と変化した都市計画の将来像が、「地図・絵図」からうかがえます。平成も終わりを迎えた現在、かつての砂川村(町)と立川市の変遷を把握するうえで、不可欠な1点1点の地図資料から、先人の息吹とその時代の活力に思いをはせることのできる市史刊行物です。



▲砂川町全図 昭和38年 (1963) 頃



▲立川市全図 地域地区指定図 昭和31年 (1956)